

駿府におけるキリシタン殉教の地巡礼

秀吉によるキリスト教禁制も反豊臣の家康が天下を取って以来その禁制も有名無実となり、むしろ家康はキリスト教を優遇していた模様である。その家康が家督を秀忠に譲り江戸から駿府に移り住んでも政治の実権は家康が握っていたため駿府は京都に並ぶ東の都として繁栄した。

駿府には二つの天主堂が建てられ外国人宣教師や多くのキリシタンが住んでいた。その駿府において家康の筆頭武将本多正純の家臣であったキリシタンの岡本大八が引き起こした不詳事件をきっかけに家康もキリスト教禁制に踏み切らざるを得なくなり、駿府からのキリシタン掃討が始まった。以来キリシタン弾圧は全国に広まっていったが、秀忠は弾圧にはまだ穏便だったが家康への尊敬の念が強かった三代家光はキリシタンを厳しく弾圧した。そこで家康による禁制のきっかけとなった岡本大八事件および家康直属の旗本でやはりキリシタンだったジュアン原主水の殉教について少し紹介したい。

[岡本大八事件]

肥前(佐賀・長崎県の一部)の領主・有馬晴信(天正遣欧使節を企画したキリシタン大名の一人で天草に有馬セミナリオを設立)が竜造寺氏に奪われた領地の一部を何とか取り返したいと腐心していた。丁度その頃、主命により岡本大八(洗礼名パウロ)が長崎に来ていた。そこで晴信が失地回復のため幕府へのつてを探していることを知り、正純に取り成しを図ってあげようと申し出た。晴信は大八もキリシタンであることもあり、彼の言を信じて取り成しを願い謝礼として金銭を手渡した。しかし事は一向にはかどらず不審に思った晴信が直接正純に打診したところ、大八の嘘がばれ、この事件が家康の耳に入り取り調べの結果贈収賄事件として二人は逮捕された。そして大八は市中引き回しの後火炙りの刑に処せられ、晴信は甲斐に改易され間もなく斬首された。1612年のことである。そして家康は即刻キリスト教禁止令を出した。しかしこの話とは別に1610年、ポルトガルのマードレ・デ・デウス号事件という国際事件が長崎沖で勃発した。この発端は有馬晴信の家臣がマカオで殺害される事件が起こり、怒った晴信は長崎代官・長谷川藤宏と組み、長崎沖にいたデウス号を船で包囲して攻撃した。そこでデウス号は船内の火薬庫に火を放ち自爆した。その上代官長谷川はポルトガルと幕府側との交易上のパイプ役だったポルトガル人宣教師ジョアン・ロドリゲスの国外追放を迫ったため代官側とイエズス会が対立する結果となり、(以下推測だが)キリシタンだった晴信が仲裁を買ってでてこの国際問題は1件落ち着いたようである。そこでこの事件を知った岡本大八が悪計を案じ、晴信に家康からの感謝状と失地回復を許可するとの書状を偽造して渡し謝礼を要求し晴信から受け取った。しかし間もなくこの嘘もばれて二人が逮捕されたという話もある。いずれにしろキリシタン同志の贈収賄事件はキリシタンにあるまじき所業であり、神の怒りがくだって当然であろう。この時のキリスト教禁制が20年後の島原・天草の乱の引き金になったことは間違いない。

[原主水の殉教]

一方、原主水の殉教は先の晴信・大八事件とは正反対の義話である。彼は家康の小姓から立身した側近で1500石の旗本の一人である。彼は駿府にいた宣教師から洗礼を受けジュアン(ヨハネ)と名乗った。ところで1612年の大八の事件で家康が城内のキリシタンの詮索を開始したこと

を知り、いち早く駿府から逃亡した。やがて城内や城下に沢山いたキリシタンが摘発され、改信・棄教を迫られた。外国宣教師には国外追放の処置をとった。命令に従わなかった宣教師や棄教を拒否したキリシタン達は捕縛され処刑された。静岡市の安倍川に千人塚という地名があり、処刑されたキリシタンを葬った所とされる。しかし家康のキリシタン狩りをいち早く察知してただ一人で逃亡し大宮、春日部に潜伏した主水は自分のしたこの行為を悔い終生忘れることはなかったと言う。しかしこの逃亡も間もなく岩槻城主配下の役人に見つかり駿府に送り返された(1614年)。彼は即刻安倍川の土手で磔(ハツケ)にされ、額に十字の焼印を押されて手足の指、あるいはアキレス腱なども切られて放置されたという。瀕死の状態で倒れていたのを見て救いの手を差し伸べたのが橋下の小屋に居住していた癩患者たちだった。それを知った主水の親友・岡平内がひそかに彼を救出し匿ったがすぐばれて平内が逮捕され、その禍は一家親族に及んだ。しかし幸いにも主水の居場所は発見されず捕縛は免れたが、その場所を牧ヶ谷の耕雲寺の僧が知り、夜陰に乗じて彼を背負って寺の裏の洞窟に匿い手当てをした。それもやがて奉行所の役人に知られるところとなり、住職は主水をひそかに逃がした。そして住職らは捕縛され処刑された。住職らの墓標が今も耕雲寺にあるが、いずれも戒名のない石塔である。

手足の指を切り落とされた主水がどのようにして江戸まで逃れたか不明だが浅草あたりの癩病患者の中に紛れ住み、病人の看護にあたるとともに彼らにキリスト教の真理を伝え布教に務めた。主水は安倍川の癩患者に救われたこともあって癩患者に感謝をこめて接し主キリストを信じれば救われると説き教えたのであろう。当時癩患者らは人間として扱われず近寄る人はなかった。そのため額に十字の焼印のある主水が隠れ住むにはよい選択だったと思われるし、癩患者らも自分らを人間として接してくれる親切で奇抜な人として快く主水を受け入れていたのであろう。しかし9年後の1623年江戸でのキリシタン取締りに際して誰かに密告され、47名のキリシタンと共に火刑に処せられ殉教した(元和の殉教)。ヨーロッパでは古くから教会や修道院が癩患者のケアにあたっていたが、日本では癩患者は虫けらのように捨て去られていた。しかしイエズス会の宣教師が来日するようになってキリシタンの間で癩病に対する見方が少しずつ変わってきた。宣教師が去りキリシタンもいなくなると再び癩患者に光があたることもなく、隔離政策が廃止されたのは実に昭和の戦後になってからである。

私は駿府のキリシタン遺跡を訪ねるべく今年の9月2日(土)早朝の新幹線で静岡に向かった。有難いことに静岡の知人が車で案内してあげるよとのお話でお言葉に甘え静岡駅でお会いすることにした。まず原主水の銅像(右写真・小坂圭二氏作)のあるカトリック静岡教会(駿府城内町にある)に向かった。立派な立像であるが、この像には手足に指がある? せっかく駿府城に来たのだからと何年振りかには城内を散歩したが昔の面影はほとんどなく、天主閣再建のための発掘が行われていた。城内の一角に立派な日本庭園(紅葉谷庭園)が造られていた。

つづいて向かったのは主水がしばらく隠れ住んだ牧ヶ谷の耕雲寺である。駿府城からかなり遠く離れた山裾にあった。寺僧が主水を背負ってよくここまで運んだものである。寺の墓地に代々住職の墓石があるが、その中に五基ほど戒名のな



い卵頭型の墓石がある(右写真)。前頁の新しい石碑は後年建てられた記念碑だが、罪人を匿い庇護したことで処刑された住職らの古い墓石を見ていると当時のキリシタン追跡の厳しさに胸痛む。寺の裏の崖にはいくつか洞窟があり、かつての古墳跡といわれるその一つに主水が匿われていたとのことである。



そこから一旦町にもどり、安倍川近くの安倍川餅本舗の前にある「駿府殉教乃碑」を訪ねた(右下写真)。この碑がいつ頃建てられたのかは私の調査不足で定かではないが、この付近でキリシタンが処刑されていたことを示すものである。なお、記録によると秀吉の朝鮮出兵で沢山の朝鮮の貴族の娘たちが拉致され、武士の夜伽(慰安婦)や奥方などの侍女にされていた。(徳川実記などによると)中にはキリシタンになった娘らもいて、彼女らもキリシタンゆえに処刑されたり、伊豆大島や神津島に流されたという。いつの時代も戦争はこのような悲劇を生むことを忘れてはならない。日本の政治家達はこのような歴史認識を持つとうともしない。恥ずべきことである。



この後お昼もだいぶ過ぎて、かつて徳川慶喜の屋敷跡、今は浮月楼という料亭に昼食をと寄ってみたが予約満員でアウトだった。仕方なく昼食をあきらめ大崩海岸を通過して焼津に向かった。大崩海岸は糸魚川から南アルプス(天竜川)を経て静岡に至る日本最大の断層の南端で地層が極めて脆く、崩壊した断崖が続く。この突端に「松風閣」というホテルがあり、ここの庭から見る駿河湾の景観が素晴らしい。快晴なら富士山や伊豆半島が望める。天皇ご夫妻もこのホテルに宿泊されている。岬の突端なので三方海に囲まれて警護しやすいからだろう。ホテルの人によれば天皇来泊の時は警備用の船が岬を囲んでいたという。私と知人はここでコーヒブレイクをとり、しばし景観を楽しんだ。そのあと焼津港に寄ったが100mもあろうかと思われる大型漁船が数隻並び、さすが日本一の遠洋漁港である。焼津に小泉八雲記念館がある。実は小泉八雲と焼津の関連を私はしらなかった。八雲は焼津に短期間住んでいたこともあり、島根とも縁が深くここに記念館ができたのである。こじんまりしているがなかなか中身の濃い良い記念館である。ここを見てから知人とは別れ、その日は浜松駅前のホテルに投宿した。ホテルに入るまえ晩ご飯に久しぶり鰻でもと駅裏の老舗鰻屋に行ってみたが休店で、すぐ近くのホテルの鰻屋に入った。メニューを見ると一番安いうな重でも3千円、天満の鰻屋の倍もする。仕方なくそれにする。隣のテーブルに学生らしい若者二人がうまそうにうな重を食べている。地元の学生さんかと聞いたら、東京から週末を利用して感光できた。今日は浜松明日静岡と言っていた。東京といっても地方から東京の大学に来ていると言っていたが、今の学生さんはなんと幸せなことか。私らの学生時代は鰻を食べるなど思いもよらなかった。